

阿闍世コンプレックスにおける韋提希という女性について

境 明穂

はじめに

阿闍世コンプレックスという概念がある。戦後日本において精神分析の礎を築いた精神分析家である古澤平作（一八九七—一九六八）が提唱した、日本独自の精神分析的概念である。阿闍世とは、印度の釈迦時代の仏典に登場する王子の名前であり、古澤はその阿闍世の物語を土台に阿闍世コンプレックスを提起した。古澤亡き後の阿闍世コンプレックスの研究は、小此木啓吾（一九三〇—二〇〇三）によって続けられ、理論の整理が試みられた。

古澤・小此木が描いた阿闍世物語には二つの主語・主観が導入されていることを妙木（2001）は指摘している。その一つは阿闍世のものであり、もう一方は阿闍世の母である韋提希である。本稿は、その韋提希という女性について検討することを主眼とし、古澤と小此木の研究の流れを踏まえて、韋提希その人について考えることを目的とする。韋提希という女性について何が語られ、そして何が語られてこなかったのか。それらを明らかにすることは、母親である女性を見る時、私たちが何を見て、何を見ないようになってしまうのかを改めて問い直すことにつながると考える。

阿闍世物語の変遷について

私たちはソフォクレスの戯曲『エディプス王』を読むことによって、フロイトがその物語のどこからエディプス・コンプレックスという人類が普遍的に抱く願望や葛藤を見出したのかを追体験することができる。一方、阿闍世コンプレックスを理解しようと、その基となっている阿闍世物語を参照しても、その概念の成立や構造を把握することは容易ではない。なぜなら、阿闍世コンプレックスが準拠している阿闍世物語は、その出典をめぐって複雑な変遷があり、改変や修正が加えられてきたからである。西(2020)は、これらの変遷をまとめるために、古澤が示した物語を「古澤版阿闍世物語Ⅰ」「古澤版阿闍世物語Ⅱ」とし、小此木が示したものを「小此木版阿闍世物語Ⅰ」「小此木版阿闍世物語Ⅱ」「小此木版阿闍世物語Ⅲ」として整理している。これらの五つの物語の整理をもって示されているのは、改変や修正には個人や社会、その時代の無意識が投影されているということである(西、2020)。本稿では、西の分類に準じて阿闍世物語を扱う。そこに描かれる韋提希について議論する前に、まずは、「古澤版阿闍世物語Ⅰ」「古澤版阿闍世物語Ⅱ」「小此木版阿闍世物語Ⅲ」を概観し、物語の変遷を辿る。

「古澤版阿闍世物語Ⅰ」と阿闍世コンプレックス

古澤が阿闍世コンプレックスを初めて公に記述したのは、一九三一年に東北帝国大学医学部の機関紙『良陵』において発表した『精神分析學上より見たる宗教』であった。同論文は後に『罪惡意識の二種——阿闍世コンプレックス』に改題され、一九三二年古澤のフロイト宅訪問時に、ドイツ語訳にされたものがフロイトに直接手渡された。さらには、後に冒頭部分を削除したものが一九五四年に精神分析学会の学術雑誌である精神分析研究に再発表されている。この論文に描かれているのが「古澤版阿闍世物語Ⅰ」(以下、「古澤版・Ⅰ」)である。まずはこの物語と阿闍世コンプレックスについて書かれた文章を中心に、論文の内容を概観する。

まず、古澤はフロイトが『トータルテムとタブー』にて描いた父を殺した子を感じる罪惡感について述べている。古澤が強調したのはそうした罪惡感だけでなく、罪が許されたことによって生じる罪惡感である。後者の罪惡感を懺悔心と呼び、そしてこの懺悔心を示す例として、子どもがつい皿を落として破損してしまったという比喻が描かれている。それは、皿を割ってしまったことを悪かったと思い、謝罪する子どもを責めるのではなく、それを許す親の態度によって、子の心の中に先のものとは別の罪惡感——許されたという罪惡意識、つまり懺悔心——が湧くというエピソードである。

さらに古澤は、あくなき子どもの「殺人的傾向」が「親の自己犠牲」に「とろかされて」生じる懺悔心を描こうと阿闍世物語を引用している。物語の要約を以下に記述する。

阿闍世は提婆達多に唆され、父である頻婆沙羅王を幽閉する。しかし、幽閉された父が生存している事実を知り激しく怒る。さらには、賊なる父と伴ったとして母の韋提希の髪をつかみ、その胸に剣を突き刺そうとするが、大臣たちの制止と忠告を受け、母の殺害を思いとどまる。阿闍

世は父を再び幽閉し、その後国王の座に就く。王となった彼は、五慾ごよくの楽しみを恣ほしにしたいという理由で父を殺害するに至る。しかし、父を殺害した深い後悔とともに悪瘡あくかさという病に苦しむ。阿闍世は佛陀のもとを訪れるよう助言する父の声を聴く。佛陀の慈悲の心によって救われた阿闍世の内に懺悔心が発生する。

先に、この物語は、罪が許されたことによって生じる懺悔心について書いたものであると述べた。自分の欲を満足させるために父を殺害したことを後悔した阿闍世は、悪瘡という悪性の皮膚病になり、父を殺した罪悪感に苦しむ。罪を犯した阿闍世を救ったのは、佛陀の慈悲であり、佛陀に許されたことによって懺悔心が生じている。

古澤は阿闍世物語の引用の後、阿闍世の欲望の中心がエディプスのそれとは異なることを述べている。エディプスの欲望は「母に対する愛のために父王を殺害するところ」にあり、一方で阿闍世が父を殺害するに至った欲望の源は「青春今や去らんとした韋提希が父王との間に子なきため、容色の衰うると共に王の寵愛の去ることを憂いたる悲しむべき母の煩悶」にあるという。そして、次のエピソードを記載している。

あと三年経てば天命を全うするという仙人をむりに殺害させて、懷妊した韋提希は予言者の言の如く父王の右足の血が吸いたくなくなりして、着々その予言の如き事実の現われに已に身心を悶なした。斯くて生れた阿闍世が已に両親に生れ乍ならの敵意をいだいたことは当然である。熱き血潮みな漲みなぎる、武勇並びなき彼阿闍世が、他目には世にも幸福なる王子であった。が日々夜々襲いかか

る不思議な黒雲は拭えどもつきなかった。時は来た。仏陀教団の革命児提婆の野心は遂に彼の黒き影の正体を暴露した。彼、阿闍世は斯くして遂に父王を殺害したのである。

ここを含んだものが「古澤版・I」である。先の引用とつなげて物語を見てみよう。王との間に子が無かった韋提希が、自らの容姿が衰えることや王の寵愛を失うことを憂いた結果、仙人を殺すことで懷妊に至ったというのが阿闍世の出生の由来である。仙人が残した予言に慄きながらも、韋提希は阿闍世を生む。こうした背景があり、生まれながらに両親に敵意を抱いていた阿闍世は、その事実が提婆達多によって明らかにされたことで、父を幽閉した。そして、母が父を助けていたことを知り、母を殺害しようとしたが大臣の忠告によってとどまり、後に「五慾の樂しみを恣にしようと」父を殺害するに至った。

論文に戻ると、古澤はその後、「生命の本源たる『母を噛み砕く』」口愛サディズムが原始的な暴虐であることに触れ、阿闍世コンプレックスを定義するに至っている。

実際分析学上、母を愛するが故に父を殺害せんとする慾望傾向なるものの外に、母を愛するが故に母を殺害せんとする慾望傾向を来す精神病者がある。前者はエヂポス錯綜と名づけて居る。余は後者を阿闍世錯綜と名づけたい。エヂポスは父を殺害した。阿闍世は母をも殺害せんとした。父は殺さるるも、尚生命の本源に残る。母を害せば如何。人生の根本問題は生命の本源に向っての返事であろうか。

ここにある、「母を愛するが故に母を殺害せんとする慾望傾向」が阿闍世コンプレックスの定義である。古澤は先の阿闍世物語から、生命の源である母を愛しながらも、破壊しようとする阿闍世の暴虐な欲望を見出した。幽閉したはずの父を母が助けていたことに怒り、母を殺害しようとする場面から、母を愛していたからこそ殺害しようとしたという阿闍世の無意識の動機を読み取り、そうした阿闍世の深層心理のことを阿闍世コンプレックスと古澤は述べたのである。

ここで、この「古澤版・I」の出典について述べておく。古澤がどの仏典を参照して物語を示したのかは長らく不明であったが、二〇〇九年になって宗教学者・哲学者の岩田文昭によって、その大部分が近角常観の『懺悔録』(1905)を引用したものであることが明らかになった。近角常観は浄土真宗大谷派の僧侶であり、近代の日本思想史・精神史において重要な位置を占めており、明治末から昭和初期にかけて、青年知識人の思想形成に大きな影響を与えた人物である。古澤もまた、青年時代に常観と出会い、その思想に大きく影響を受けた青年の一人である(岩田、2014)。しかし、後ほど検証することになるが、古澤が引用したのは物語の一部分であり、阿闍世の出生に関する逸話については、『懺悔録』には見当たらない部分である。

「古澤版阿闍世物語Ⅱ」と阿闍世コンプレックス

古澤が最初に阿闍世コンプレックスに関する論文を書いた約二十年後、一九五三年にフロイトの著作

の翻訳集である『続精神分析入門』の訳者あとがきの一部に、古澤は新たに阿闍世物語を記した。それが「古澤版阿闍世物語Ⅱ」(以下、「古澤版・Ⅱ」)であるが、物語の概要を示す。

韋提希は子どもが無く、容色の衰えから夫の愛が薄れることを深く憂いていた。折しも、「仙人が三年後に死去し、王子となって生まれ変わる」という予言を知る。老い衰えた韋提希は待ち遠しくて苛々し、待ちきれず仙人を殺害する。殺される時に、仙人は「生まれ変わり、誕生した子が父を殺す」という予言を残す。

その後、阿闍世が誕生するが、父・頻婆沙羅も母・韋提希も可愛がり育てる。しかし、青年になった阿闍世は何となく気分がすぐれず鬱々とする。阿闍世は提婆達多に自分の前歴を聞き、そのかされ父を幽閉する。韋提希は瓔珞に蜜を詰め、頻婆沙羅に差し入れる。幽閉しているはずの父が元気なことを知り、阿闍世は怒り、母を殺そうとする。大臣の一人が母の殺害を制止したことで、阿闍世は五体が震え、流注¹⁾という病におかされ不安発作を起こす。最終的に釈迦に救われる。

「古澤版・Ⅰ」では、父を殺害した後悔から阿闍世は病におかされているが、「古澤版・Ⅱ」では父の殺害は削除され、それどころか、母を殺害しようとしたことを止められたことによって阿闍世は病になったと描かれている。さらには、前半部分に阿闍世の誕生にまつわるエピソードが書かれることで、出生前から抱いた母への怨みが背景となり、殺意へと繋がるのが「古澤版・Ⅰ」よりも示唆されている。物語全体として、「古澤版・Ⅰ」よりも母子の物語であることが強調されているのである。

この論文では、古澤は阿闍世コンプレックスには触れていないが、先の阿闍世コンプレックスの定義

と合わせるとこの物語はどう読み取れるだろうか。同じように、阿闍世は母が父を助けていたことを知り、怒り、母を殺害しようとする。「古澤版・Ⅰ」と異なるのは、それを止められたことで、阿闍世は病におかされるのである。阿闍世の病の直接的原因が母への殺意として、この改変によって古澤は「母を愛するが故に殺害せんとする欲望傾向」そのものが、病理へと繋がる可能性を強く示唆したかったのではないだろうか。

「小此木版阿闍世物語Ⅲ」と阿闍世コンプレックス

古澤の阿闍世コンプレックスの研究は、医学生時代から精神分析に関心を持ち、古澤に指導を受けてきた小此木啓吾へと引き継がれた。小此木が古澤から聞いていたのは、「古澤版・Ⅱ」と同じ内容であったという（小此木、2001b）。小此木は、一九七三年、一九七八年に阿闍世コンプレックスにまつわる論文を書き、そこに阿闍世物語を示してきたが、それらには多くの仏教関係者による批判が集まった。古澤が仏典に忠実であったのに、小此木はそうではないという批判である。これらを受け、できるだけ仏典に忠実であろうと、小此木は母の救いをテーマにした『観無量寿経』を原典として、「小此木版阿闍世物語Ⅲ」（以下、「小此木版・Ⅲ」）（小此木、2001a）を書いたという（小此木、2001b）。話の流れは以下である。

韋提希は自らの容色の衰えとともに、夫・頻婆沙羅の愛が薄れていく不安を抱き、王子が欲しい

と強く願う。その折に、仙人が三年後に死去し、生まれ変わって韋提希の胎内に宿するという予言を知る。韋提希は不安のあまり、三年を待つことができず、子どもを得たい一念から仙人を殺害する。仙人は「生まれ変わって誕生した子が父を殺す」という予言を残す。韋提希は妊娠するが、胎児である阿闍世の恨みが恐ろしくなり、産んでから高い塔から落として殺そうとする。阿闍世は死なずに生き延びるが、小指を骨折する⁽²⁾。

阿闍世は提婆達多から自分の出生の由来を知り、理想化していた母・韋提希に幻滅し、殺害を試みる。しかし、母を殺そうとした罪悪感のために流注という病におかされる。悪臭を放つ阿闍世を韋提希が看病するが、効果は上がらなかったため韋提希が釈迦に救いを求める。釈迦との出会いを通して自らの心の葛藤を洞察した韋提希が阿闍世を看病することによって、阿闍世の傷も癒える。

古澤版の二バージョンと比較して、「小此木版・Ⅲ」は、韋提希が出産後に阿闍世を殺害しようとした場面と、韋提希自身が救われ、阿闍世を看病する場面が加えられている。「古澤版・Ⅱ」では、母を殺そうとしたことを大臣に制止されたことで阿闍世が病になっている一方で、小此木版からは殺害を試みたことで罪の意識を感じ、病に罹患している。また、父・頻婆沙羅に関して幽閉や殺害などの記述が一切なく、「古澤版・Ⅱ」からより進んで母子関係を描いた物語であることが強調されている。

古澤(1931)の阿闍世コンプレックスの定義は「母を愛するが故に母を殺害せんとする欲望傾向」であった。西(2020)も述べるように、小此木はどの仏典を参照してもそのことが阿闍世物語に描かれていないことから、誕生後の阿闍世を韋提希が殺そうとしたエピソードを加え、「母親に自分の愛を裏切られた」

(小此木、2001b)ことを阿闍世が韋提希に抱いた殺意の現実的な理由として描いたのである。

最終的に小此木が阿闍世コンプレックスに見出したのは、次の三点であった。

- (1) 母親における子どもを持ちたいという願望と子殺しの願望の葛藤
- (2) 子どもにおける未生怨と母親殺しの願望
- (3) 罪悪感の二種(処罰型とゆるされ型)

小此木は、阿闍世コンプレックスを臨床的に発展させていく中で、「母を愛するが故に母を殺害せんとする欲望傾向」という古澤(1931)の定義以上の意味を阿闍世コンプレックスに見出した。そこには、古澤(1931)にあった仏教的な慈悲の体験という治療機序とは異なる、精神分析的治療の理論として阿闍世コンプレックスを位置付けるという意味もあったという(小此木、2001b)。

近角—古澤—小此木に見る韋提希

さて、ここまで、古澤(1931)、古澤(1953)、小此木(2001a)の三つの阿闍世物語を整理してきた。これらに、古澤が引用したという近角常観の『懺悔録』(1905)も参照し、これら四つの物語に描かれる韋提希について、検討を行う。時系列に沿って整理したものを、表1に示す。⁽⁹⁾この表を基に、韋提希という女性がどのように描かれるようになっていったか、詳細に論じる。

表1 近角－古澤－小此木における韋提希

	近角常観	古澤版・Ⅰ	古澤版・Ⅱ	小此木版・Ⅲ
煩悶		「子なきため、容色が衰えと共に王の寵愛が去ること」	「子供が無いうえに、年老いられる身の容色の衰退が、やがて王の愛のうすれゆく原因となること」	「みずからの容色の衰えとともに、夫である頻婆沙羅の愛が薄れていく不安」「子が欲しいと強く願う」
仙人殺害		「あと三年経てば、天命全うするという仙人をむりに殺害」	「三年が待ち遠しくていらいらし、待ちきれずに、迷妄なる心は妃を駆ってこの仙人を殺害して」	「三年を待てず、子供を得たい言う一念からその仙人を殺してしまった」
予言に怯える		「父の右足の血が吸いたくなり、予言が現実になることに身心を悶した」	(予言はあったが、韋提希が怯える場面は描かれていない)	「おなかの中の胎児である阿闍世の怨みが恐ろしくて」
出産と殺意				「産んでから高い塔から落とし殺そうとした」
夫を助ける	「麦粉を蜜で煉って、それを自分の肌に塗り」「瓔珞に葡萄の果汁を詰め、密かに食物を勧めた」	(後に「賊たる父の王と伴なれば」という記述があり、助けていたことが暗示)	「瓔珞に蜜をつめ、こっそり王にさし入れして」	
殺意の理由	「賊たる父の王と伴なればなり」	「賊たる父の王と伴なればなり」	「賊の父と通じた」	出生の由来や経緯を知り、「それまで理想化していた母への幻滅」
嘆き	(幽閉され)「世尊我身夙世何の罪ありて、此の如き悪しき子を生みしか。」			(「釈迦に悩みを訴えた」とあるが、阿闍世の看病の効果についてであると考えられる)
救い	佛陀の光明によって救済			釈迦との出会いを通して、自らの心の葛藤を洞察
看病	薬を塗るが、効果なし			献身的看病も効果がなかったが、韋提希の洞察後に効果あり

一 描かれるようになったもの

まず見えてくるのは、阿闍世出産までの韋提希が抱いた煩悶や葛藤が明確に描かれるようになったことである。これは、先にも述べたように近角(1905)の『懺悔録』には描かれていない場面であり、古澤と小此木の阿闍世物語の特徴と言えるだろう。子どもが無かったこと、容姿が衰えることで、夫の愛を失うことを韋提希は憂いた。そして、子どもが欲しいあまりに仙人を殺害した。そして、仙人の残した予言——生まれ変わった子が王を殺す——に怯える。さらには、小此木版に至っては、生まれた子を殺害しようと、高い塔から落とした。小此木(2001a)はこの部分に関連して、子どもを持つことをめぐる母親の葛藤を取り上げ、「妊娠前アンビバレンス(Feder)」や「想像上の赤ん坊(Labovici)」といった精神分析理論と阿闍世コンプレックスの接点を見出していた。小此木も述べるように、母親が抱くこうした葛藤や敵意、拒絶感といった苦悩は、抑圧され見えてこなかったものである。一九七〇年代頃から臨床現場において子育ての困難を訴える母親たちの姿を間近で見ていた小此木(2003)にとって、こうした母親の姿に光を当てたことは阿闍世コンプレックス研究の一つの到達点といえるだろう。

二 描かれなくなったもの

一方で、近角版では語られていたにもかかわらず、古澤版、小此木版では描かれていない場面がある。それは、阿闍世に殺害されかけ、幽閉された韋提希が嘆くシーンである。近角(1905)の物語を見てみよう。大臣の制止によって、阿闍世は韋提希を殺害することを思いとどまる。しかし、韋提希を宮殿の奥

深くに幽閉して、一步も外に出させないようにする。幽閉された韋提希は、心身が疲弊し、憔悴して、見る影のない有様になる。そのような状態であったので、韋提希は佛陀の慰めを得たいと祈り、現れた佛陀に向かって次のように嘆くのである。「世尊我身夙世何の罪ありて、此の如き悪しき子を生みしか。」我が子に殺意を向けられ、愛する夫を殺害された女性の、悲痛な嘆き、絶望の言葉である。「古澤版・I」では近角のものと同様に殺意を向けられ、夫を殺害されるが、それに対する韋提希の思いは描かれない。「古澤版・II」「小此木版・III」でも、殺意を向けられているが、韋提希の心象描写はない。「小此木版・III」では、「お釈迦様にその悩みを訴えて救いを求めた」とあるが、文脈からして、病になった阿闍世の看病の効果が上がらないことについての悩みであると読み取れる。なお、小此木(2001a)が参考にしたとされる『観無量寿経』においては、韋提希の嘆きは描写されており、そのことを小此木は見落としていたわけではないようである(小此木、2001b)。

三 阿闍世物語における韋提希の声

阿闍世誕生前の韋提希の葛藤については詳細に描かれるようになった一方で、出生後に起きた悲劇に対する韋提希の悲嘆や悲痛は削除されていることが明らかになった。自らが殺意を向けられ、愛する人を殺害された女性である韋提希の苦しみや傷つきが残らなかったのは、なぜだろうか。ここに、主体を持った一人の傷ついた女性として韋提希を見ることができなくなっているのではないかという可能性が考えられる。

従来の精神分析理論が、母親を受動的な存在として、その人自身の欲望を持つことを想定されてい

い存在として描いてきたという批判や、さらにはそれが現在においても通底してはいないかという問題意識は、ジェシカ・ベンジャミンを中心とする精神分析的ジェンダー論から論及されてきた。ここでは、子と母を「主体と客体(対象)」という一者心理学的枠組みで捉えてきたことが指摘されているが、古澤・小此木の描いた阿闍世物語における阿闍世と韋提希も、阿闍世を主体に、韋提希を客体に置く構造であったと考えられる。なぜなら、古澤・小此木の韋提希は、子どもを持つことに葛藤を抱き、子に殺意を向けた母であり、そのことで子から恨まれ子を思わせる母であり、そして子をケアする母であるからである。韋提希の葛藤や殺意は、阿闍世の病理を理解するために描かれ、利用されたのではないだろうか。そういった意味で、古澤・小此木の描いた阿闍世物語は、やはり子ども側からの物語であり、その結果、そこにある韋提希の悲痛な思いは看過されてしまったのだと考えられる。

また、こうした傷つきに目を向けることの難しさは、阿闍世物語や古澤や小此木の時代に限った話ではない。イスラエルの社会学者であるオルナ・ドーナトは『母親になって後悔している』(2016)の中で、母親の葛藤やアンビバレンスは徐々に認知されるようになったものにも関わらず、「不満を持ち、混乱し、幻滅している母の声に関しては、依然として制限と非難の対象となつている」と述べている。そのような母の声は、子どもの存在を否定し、子どもを傷つけるものとして認識され、忌避されてきたからである。また、重要な点として、『母親になって後悔している』(2016)には、子どもや子どもとの絆、そして自分自身を守るために、母になったことの後悔を話さないことを自ら決めた女性がいることが示されている。韋提希の嘆きはまさに、悪い子どもを生んでしまった後悔であり、阿闍世の存在を否定し、阿闍世を傷つけうるものであった。二人の関係にこれ以上の亀裂を入れないために、韋提希自身が沈黙を選んだのではないだろうか。

おわりに

韋提希という女性がどのように描かれていったのかを検討することによって、子どもの視点に立つあまりに母親の思いや立場に立つことが難しくなる、という構造が見えてきた。さらには、そこにある傷つきや苦しみを避けようとする外側からの、そして内側からの動きがあったのではないかということが示唆された。

しかし、ベンジャミン(1988)が「自分とは違う意思や感じ方を持った、自分と同等の権利をもつはずの、主体としての他者」を認めることを発達の重要な課題としたように、子には子の、母には母の情緒や思考、体験があることを私たちは知っているはずである。韋提希を「主体としての他者」として見つめ直すことは、単なる物語の再読ではない。それは、現在においてもなお、母親という属性を持つ女性を見つめる際に生じやすい盲点を警告するものである。

(京都文教大学臨床心理学部)

文献

- Benjamin, J. (1988) *The bonds of love: Psychoanalysis, feminism, and the problem of domination*. Pantheon Books. 寺沢みづほ訳(1996)『愛の拘束』、青土社。
- Benjamin, J. (1998) *Shadow of the Other: Intersubjectivity and Gender in Psychoanalysis*. Routledge. 北村婦美訳(2018)『他者の影——ジェンダーの戦争はなぜ終わらないのか』、みすず書房。
- 近角常観(1905)『懺悔録』、文光堂・森江書店。
- Donath, O. (2016) *Regretting Motherhood: A Study*. North Atlantic Books. 鹿田昌美訳(2022)『母親になつて後悔している』、新潮社。
- 古澤平作(1931)『精神分析學上より見たる宗教』、長陵。
- 古澤平作(1953)『世界観について』、『フロイド選集』〈三〉——統精神分析入門』、日本教文社。
- 岩田文昭(2014)『近代仏教と青年——近角常観とその時代』、岩波書店。
- 岩本裕(1988)『日本佛教語辞典』、平凡社。
- 妙木浩之(2001)『記憶と物語——『罪惡意識の二種』によせて』、小此木啓吾・北山修(編)『阿闍世コンプレックス』、創元社、pp. 116-130。
- 西見奈子(2020)『日本の精神分析における女性』、西見奈子(編)『精神分析にとって女とは何か』、福村出版、pp. 120-179。
- 小此木啓吾(1973)『精神分析ノート』、阿闍世コンプレックス、『精神科学』、27(9)、50-53。
- 小此木啓吾(1978)『日本人の阿闍世コンプレックス』、『中央公論』、93(6)、90-123。

小此木啓吾(2001a)「阿闍世コンプレックス論の展開」、小此木啓吾・北山修(編)『阿闍世コンプレックス』、創元社、pp. 4-58。

小此木啓吾(2001b)「古澤版阿闍世物語の出版とその再構成過程」、小此木啓吾・北山修(編)『阿闍世コンプレックス』、創元社、pp. 87-99。

小此木啓吾(2003)「母性再考——阿闍世の母韋提希の葛藤を辿る」、『精神分析研究』、47(1)、18-28。

(1) 「古澤版・I」では阿闍世が罹ったのは「悪瘡」であったが、「古澤版・II」では「流注」とされている。古澤が阿闍世物語を参考にしていたとされる近角常観の『懺悔録』に常観自身の体験が描かれており、そこで、常観が患った病が「流注」であったため、古澤の中で両者が混ざりあってしまったのではないかと岩田(2014)は考察している。

(2) 小此木は続く物語で幼い阿闍世のあだなが「指折れ太子」であったことを述べ、さらにサンスクリット語の *Ātasaṃ* を「折れた指」「未生怨」の両方を意味することを注釈にしている。ここから小此木(1987)は「未生怨」を「自分の出生の由来、つまり自己の成り立ちそのものについておこす、怨みのこと」と定義づけた。しかし、本来「未生怨」の定義は「敵のなこ」「だれも敵対することのできない」である(岩本、1988)。

(3) 表における空白部分は、その物語では描かれなかったエピソードを指す。また鍵括弧は直接引用であり、地の文については筆者によるエピソードの要約であり、丸括弧内は筆者の補足である。